

※解答に字数制限がある場合は、句読点なども字数として数えます。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

意思伝達の手段は書く、話す、しぐさをする、の三つに分類することができる。ところが読み書きを中心とした学校教育の影響で、教育を受けた者はとく書くことに最大の重点を置き、話すことにはそれほど重きを置かず、しぐさについてはほとんど考えようもしない。しかしこの三つの伝達手段は、人類の歴史や個々人の習得順序を見ても使用頻度^{ひんど}を見ても、あるいは情報の伝達量から言っても、まったく逆の順位をつけるのが妥当ではないかと思われる。

しぐさは人間だけでなく動物も使う。だからヒトの出現以前からしぐさは存在していたに違いない。母胎^たをはじめで足で蹴ったときから生を閉じるときまで、人はしぐさによる自己表現をしないではいられない。ことばを話すのはヒトの特徴であるが、それはせいぜい五万年くらいの歴史しかない。ことばを聴き始めるのは母胎の中かもしれないが、話し始めるのは生後一年くらいからであり、大人でさえ普通は一日に十分間ほどしか話をしていないのである。人類の歴史において文字ができたのは今からたかだか六千年くらい前のことである。個人をとってみても五歳以前に字の書ける人は稀^{まれ}である。今日でも文字を知らずに生涯^まを終える人間は多数存在している。確かに社会の主要な活動分野では文字が極めて重要な役割を果たしているのも事実だが、それにしても読み書きの量はしれている。人類が用いる伝達手段の中で文字による伝達はその総量において非常にAである。

こんな当たり前のことがなぜ見逃されているかというと、しぐさ、つまり非言語伝達は、話すことより早期にしかもBに習得されるからである。しぐさも話しことばも幼児期に自然にかつ十二分に習得してしまうから、ものを見たり、息をしたりするのと同じようにごく当たり前のことと感じてしまいがちである。その感じ方にも確かにそれなりの理由がある。しぐさや話しことばが成長のカチ^ちでC公式に習得され続けている一方、学校教育は従来これらを取り上げることなく、もっぱら「三つのR」つまり「読み・書き・ソロバン」という非自然的で高度に技術的な伝達手段ばかり注目してきた。学校教育が強く印象づけた部分は当然大いに人々の意識にのぼり、C公式に教わった無意識の部分は、誰かにシテキ^シされるまでまったく気づくこともない。

身体とその自然機能を創り出しているイデ^インの仕組みは、動物の場合と同じく人間にも非言語伝達を課す。それは身体が他者にとって可視的だからである。第二の伝達手段である話しことばは全人類が所有し、どのように覚えたのかすら分からぬくらい幼いときに習得するが、これこそヒトを人間たらしめるもので、言語能力をもったあらゆる人間がこれを使うのである。文字は第三の伝達手段だが、その習得は最終にして最少、失うときにはまず最初に最も容易に失われる。文字は必ずしも全人類が所有するものではないが、話しことばの延長として時空を超越する性質をもつ。その意味では文字には超人間的な性質があるとも言える。それ

はちょうど車輪がDの延長として、あるいは望遠鏡がEの延長として機能するのと同様である。この三つの伝達手段の使用量の順位は人がそれを失うときの順位にも表れる。つまり最も少ないのがF、次がG、最も量的に多いのがHである。学校教育だけが非言語伝達と話しことばにあまり注目せず、文字や算数といった不自然で人工的な手段に注意を集中し、このため多くの人々はいつの間にか読み書きが聞き話すことより大切で、話しことばの重要性に比べれば非言語伝達はとるに足らぬ些細なものと信じ込んでしまっている。もっともその順位にも文化的、質的に正しい側面もある。高邁な思想や優れた精神は永久に文字に記録され、決してその日の無駄話や身振り手振りに侵されるものではない。ただ意思疎通の量的な側面では順位が逆になるのである。

（リージャー・プロズナハン『しぐさの比較文化』より）

問一——線部(ア) (イ)のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二——第一段落から読み取れる筆者の主張として最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 意思伝達の手段は三つあるが、どれも学校教育の影響が大きい。
- 2 意思伝達の手段として最も重要なのは「しぐさ」である。
- 3 意思伝達の順位を現在の順位と逆にするのは正しくない。
- 4 意思伝達の手段の中心はやはり「読み書き」である。

問三——線部①「たかだか」とほぼ同じ意味で使われている四字のことばを文中から書き抜きなさい。

問四——Aに入る語を次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 大きなもの
- 2 小さなもの
- 3 重要なもの
- 4 当たり前なもの

問五——Bに入る語を文中から漢字三字で見つけ答えなさい。

問六——Cには打ち消しの意味を持つ漢字一字が入ります。その漢字として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 未
- 2 不
- 3 非
- 4 無

問七——線部②「ソロバン」のここでの意味として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 計算機
- 2 コンピュータ
- 3 インターネット
- 4 計算力

問八——線部③「身体が他者にとって可視的だからである」とは、どういう意味ですか。その説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 人間の体は他人から目で見ることができるといふこと
- 2 人間の体が表現できることは沢山あるといふこと
- 3 動物の視力は人間より優れているといふこと
- 4 非言語伝達を支えているのは身体だといふこと

問九 — 線部④「これ」が指している内容を文中から書き抜きなさい。

問十 — 線部⑤「時空を超越する性質をもつ」とは、どういうことですか。その説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 世界のさまざまな地域で多くの言語が使われているといふこと
- 2 文字を持たない人々も話しことは必ず使っているといふこと
- 3 文字で書かれたことは空間や時間を越えて残っているといふこと
- 4 ことを文字で表現する方法は様々なものがあるといふこと

問十一 —

D	・	E
---	---	---

に入る身体の一部を表す漢字一字をそれぞれ一つずつ答えなさい。

問十二 —

F	・	G	・	H
---	---	---	---	---

に入る語の組み合わせとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 F 読み書き G 話しことば H しぐさ
- 2 F 読み書き G しぐさ H 話しことば
- 3 F しぐさ G 話しことば H 読み書き
- 4 F しぐさ G 読み書き H 話しことば

問十三 本文で述べている筆者の主張として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 人間の意思伝達の手段である「しぐさ」は、無意識・自然に習得され、その働きは小さなものである。
- 2 人類の歴史の中で文字の使用はそれほど長い期間ではないが、その重要性は最も大きなものである。
- 3 学校教育が取り上げてきた高度に技術的な伝達手段である「読み・書き・ソロバン」は、今日でも最も重要なものである。
- 4 非言語伝達である「しぐさ」は、軽視されがちであるが、様々な観点からその重要性を見直すべきである。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題の都合上、一部省略した部分があります)

智と二人、自転車で連れ立って、家を出た。親子で河川敷のグラウンドに向かうのも、今日が最後だ。よくつづいた。しみじみ思う。智は一日も練習を休まなかった。将来の夢は甲子園出場だと屈託なく話していた下級生の頃はもちろん、レギュラーの望みがなくなっただけから。

「おとうさん、今日の相手って強いのか？」

前を走る智は、振り向いて訊いた。

「ああ、すごいぞ」せいぜいっばい明るい声をつくった。「いままででいちばん強いかもしれない」

「ひえーっ、二十連勝やバイじゃん」

「だいじようぶさ、ふだんの実力どおりにやれば勝てるから」

「じゃあ、がんばって声出さないとね」

智は前に向き直って、力を込めてペダルを踏んだ。最初から自分はベンチで声を出す係だと決めてかかっていて、それをひねたり悪びれたりすることなく受け入れている。

① まじめな子だ。素直な子だ。こつこつと努力してきた。その結果が — ② これだ。

智のユニフォームの背中の16から、徹夫はそつと目をそらした。高校時代を思いだす。盆も正月もなく練習に明け暮れたすえにレギュラーポジションを獲得し、背番号7のユニフォームを受け取ったときの喜びは忘れられない。甲子園出場を決めた瞬間の、空のてっぺんで太陽が爆発したような喜びも、ちゃんと記憶に残っている。だが、いま、背筋がゾクツとするぐらい生々しくよみがえってくるのは、③ レギュラーになれなかった同級生のうつむいた顔や、ゲームセットと同時にグラウンドで泣き崩れた相手チームのエースの後ろ姿のほうだった。

交差点で、レギュラー組の子が三人、合流した。

四台の自転車はグラウンドへの一番乗りを競うようにスピードを上げた。智も補欠の引け目などおくびにも出さずに、元氣いっばい自転車漕いでいる。

ここからはもう父親じゃないんだぞ、と徹夫は自分に言い聞かせた。背番号16を父親のまなざしで見ると、チームの中では、智に「おとうさん」と呼ばせないようにしている。徹夫も智のことを「加藤」で呼ぶ。

加藤はへただもんな、しょうがないよな、試合には出せないよ……。いつも心の中でつぶやく。智、ごめん。あとで必ず、心の中で詫言る。

「試合に出られないんだったら、つまらないから、もうやめる」

もしも智がそう言い出したなら、どうしただろう。

引き留めなかったような気がする。

④ 本音ではそれをずっと待っていたのかもしれない、とも思う。

午前十時の試合開始に合わせて、九時から練習を始めた。二十連勝のかかった、しかもこのチームで最後の試合というせいもあるのか、レギュラー組の動きがどうも堅い。特にエースの江藤くんは、いつになくコ

ントロールが悪く、ブルペンでしきりに首をかしげている。

相手チームは、練習を見ただけでもそうとう鍛えられているのがわかる。特にピッチャーは体が中学生なみに大きく、球も速い。地区の取り決めで、肘に負担のかかる変化球は投げさせないことになっているが、直球一本でも手こずりそうだ。

「監督、ちょっといいですか」と子供会の会長にバックネット裏から呼ばれた。

後任の監督を紹介された。がっしりとした体つきで、人なつっこい笑顔を浮かべる、こどもとスポーツがいかにも好きそうな雰囲気の男だった。

かんたんな挨拶を交わしたあと、彼は「相手のエース、かなりいいですね」と徹夫にいった。「お手並みハイケン」と試されているような気がして、内野ノックについてしまい、打球はどれもヒット性の強いものになってしまった。

ノックを終え、ベンチに戻ってメンバー表に名前を書き入れていった。

スタメンの欄はノートに書いたとおりで埋まったが、控え選手のところでも迷った。江藤さんの調子を見ると、ピッチャーがもう一人いたほうがいい。新チームのエースになるはずの五年生の長尾くんを控えに入れておくべきかもしれない。

「富士見台クリップパーズさん、いいですか？」

主審がベンチにメンバー表を取りにきた。

「はい……すぐに」

バックネット裏にちらりと目をやった。長尾さんの両親は来っていない。

まなざしを横に滑らせると、智が見えた。他の選手がおざなりにすませる膝の屈伸運動を、智一人だけ、ていねいに、一所懸命にやっている。

「監督さん、いいですか？」

主審にうながされ、補欠の欄のいちばん下に〈加藤〉と走り書きして渡した。

そのとき、バックネット裏で歓声があがった。振り向くと、四番バッターの前島さんの両親がへめぜ不敗神話 祈・20連勝と書いたオウダンマクを広げていた。

徹夫は、相手チームのベンチに向かいかけた主審をあわてて呼び止めた。

⑤ メンバー表の〈加藤〉を二重線で消して、横に〈長尾〉と書き込んだ。

智は下級生といっしょにベンチの横に並び、グラウンドの選手たちに声援を送っていた。

最後の試合に、出場どころかベンチ入りすらできなかったのに、智の様子はふだんと変わらない。どこか気まずそうな六年生の仲間に「がんばれよ」と声をかけ、自分と入れ替わって五年生でただ一人ベンチ入りした長尾くんにも笑顔で接する。

俺なら、そんなことはできなかった。高校時代を振り返って、徹夫は思う。負けず嫌いの性格だった。野球だけでなく、勉強でも他のスポーツでも、負けたくないから必死にがんばってきた。それが報われたこともあったし、報われなかったことも、もちろん、ある。

がんばらばいいことが——「ある」とはやはり言えなくとも、「あるかもしれない」くらいなら言っ

やれるかもしれない。「いいことがあるかもしれないから、がんばる」と言葉を並べ替えてもいい。

だからこそ、本音を言えば、徹夫にはよくわからないのだ。

⑥ 「いいことがないのに、がんばる」智の気持ちだ。

監督としても、親としても、それは決して口にはできないことなのだが。

二回を終わって○対○。相手チームのエースは予想以上の好投手だった。一方、江藤さんの調子は予想以上に悪い。球が高めに浮き、スピードもキレもない。捕まるのはAの問題だろう。

徹夫は打撃陣にバットを一握り短く持つよう指示を出し、六年生の控え投手の水谷くんウォーミングアップを命じた。息子の晴れ姿をビデオで撮っていた江藤さんの父親はムツとした顔でベンチを見たが、逆に水谷さんの両親はブルペンの前に場所を移し、Bした顔で試合を見守っている。

三回裏、相手チームの先頭打者がフォアボールで出塁した。つづく打者はきっちり送りバントを決め、しかも江藤さんが打球の処理にもたついてしまい、ノーアウト一、二塁。打順はクリーンアップにまわる。

徹夫はタイムをかけて、キャッチャーの安西くんをベンチに呼び、江藤君の調子を探ねた。(a)、このインングに入ってから、すべての球がサインとはぜんぜん違うコースに来ているという。

交代だ。ここで点を取られるわけにはいかない。ブルペンの水谷くんを見た。ウォーミングアップは、もうじゅうぶんだろう。

(b)、主審に手を挙げようとした、そのとき——。

「裕太、がんばれよ！ まだいける、まだいける！」

バックネット裏から、江藤さんの父親の檄が飛んだ。息子ではなく、徹夫に聞かせたかったのかもしれない。

徹夫はベンチから浮かせた腰を、すんと下ろした。腕組みをして、勝手にしろ、と声にならない声で吐き捨てる。

続投した江藤さんは、次のバッターの初球にワイルドピッチをした。ランナーは二、三塁に進む。徹夫は敬遠のサインを送った。だが、頭に血がのぼった江藤さんの目には入っていないようだ。

まずいぞ、と思う間もなく江藤さんは投球動作に入った。もうタイムもかけられない。

スパーン！ と快音が響く。

左中間にライナーで飛んだ打球はぐんぐん伸びて、レフトの前島さんの差し出すグローブのはるか上を越えていった。

C な三点が、入った。

救援のマウンドに登った水谷くんも打ち込まれた。三番手の長尾くんも、火のついた相手チームの打線には通用しなかった。

五回の裏を終わったところで○対八。相手チームのエースはあいかわらず絶好調で、まだ一安打しか許していない。攻略の糸口は見つからない。(c) 見つけても、長尾くんが追加点を奪われるほうが先だろう。

「監督さん」

ショートの吉岡くんの父親が小走りにベンチ裏に来て、言った。

「もう試合の勝ち負けはいいですから、補欠の子もみんな出してあげましょうよ。せつかくいままでがんばってきたんですから」

徹夫は黙だまってうなずき、帽子(正)を目深にかぶり直した。

今日なら、出せた。この試合なら、智を出しても誰からも文句は言われなかった。

あいつの努力を最後の最後までむだにしたのは、俺だ。腕組みをして、地面に落ちる自分の影をにらみつけて、思う。

後悔はしない。勝つためにベストをつくしたのだ。

(d) — 俺は智の父親として、この監督のことを一生許さないだろう。

六回表の攻撃で、山本くんをピンチヒッターに送った。一家の声援を受けて、ツースリーまで粘ったが、最後は空振り三振。思いきりスイングしてよじれてしまった背中の14の数字が、一瞬、智の背負った16に見えた。

悔しそうな顔でひきあげてくる山本くんは、ベンチの横から励はげましの声が飛んだ。

「惜しい惜しい、ナイススイング」

智だった。

徹夫と目が合った。

智は、元気出さなくちゃね、というふう⑦に微笑み、うつむいて、もう顔を上げなかった。

試合が終わった。○対十の完敗、いや、惨敗* ざばいだった。

川を吹き渡る強い風が、グラウンドの土埃を舞い上げる。天気予報より少し早く、試合が最終回に入った頃から風が強くなっていた。

加藤 — と呼びかけて、試合はもう終わったんだと思い直し、父親に戻った。

「智、ちょっと残ってる」

智は一瞬きよとした顔になったが、すぐに「オッスー」と帽子をとって答えた。

バックネット裏では、江藤くんの一家が、ビデオの液晶モニターのぞを覗き込んで、さっそく息子の晴れ姿の鑑賞会を開いていた。

ベンチに座って、敵も味方も観客もひきあげたグラウンドをぼんやりと眺めながら、徹夫は煙草を一本吸った。強い風が煙を吹き飛ばしてしまうせいか、煙草はいがらっばいだけでちっとも味がしない。

「おとうさん」隣に座った智が言った。「いいの？ もうすぐ打ち上げ始まっちゃうんじゃない？」

「いいんだ、どうせ先に始めてるさ」

徹夫は笑いながら言って、ゆるんだ頬ほおがしまないうちにつづけた。

「智、今日、残念だったな」

「しょうがないよ、江藤くん調子悪かったし、向こうのピッチャーすごかったもん」

「いや、そのことじゃなくてさ……おまえのこと、試合に出せなくて……」

「いいってば」

声は明るかったが、顔はさつきと同じようにうつむいてしまった。徹夫と反対側の隣に座った佳枝が、智の肩越しにこっちを見ていた。目が合うと、しょうがないわよ、と小さくうなずく。

がんばれば、いいことがある。努力は必ず報われる。そう信じていられることもは幸せなんだと、いま気づいた。信じさせてやりたい。おとなになって「お父さんの言ってたこと、嘘だったじゃない」と責められてもいい、十四歳やそこらで信じることをやめさせたくはない。だが、そのためになにを語り、なにを見せればいいのか、わからない。

徹夫はフィルターぎりぎりまで吸った煙草を空き缶の灰皿に捨てて、智に訊いた。

「中学に入ったら、部活はどうするんだ？」

答えは間をおかずに返ってきた。

「野球部、入るよ」

佳枝が、「今度は別のスポーツにしたら？」と言った。「ほら、サッカーとかテニスとか」

だが、智には迷うそぶりもなかった。

「野球部にする」

「でもなあ、レギュラーは無理だと思うぞ、はっきり言って」

「うん……わかってる」

「三年生になっても球拾いかもしれないぞ。そんなのでいいのか？」

「いいよ。だって、ぼく、野球好きだもん」

智は顔を上げてきっぱりと答えた。

一瞬言葉に詰まったあと、徹夫の両肩から、すうっと重みが消えていった。頬が内側から押されるようにゆるんだ。

(+) ヒョウシ（+）抜けするほどかんたんな、理屈にもならない、忘れかけていた言葉を、ひさしぶりに耳にした。

徹夫は、ベンチから立ち上がった。

「ピンチヒッター、加藤！」

無人のグラウンドに怒鳴り、智のグローブを左手につけた。

「どうしたの？ おとうさん」

「智、バット持って打席に入れ」

「はあ？」

「ほら、早くしろ」

智の返事を待たずに、試合で使わなかったまっさらのボールをグローブに収め、マウンドに向かってダッシュした。

（重松清『卒業ホームラン』より）

* 屈託……一つのことばかり気にかけて心配すること。くよくよすること。

* 惨敗……ひどく負けること。みじめな負け方。

問一——線部⑦(オ)のカタカナは漢字に直し、漢字はひらがなでその読みを答えなさい。

問二——線部①「まじめな子だ」とあるが、智がまじめであることがわかる動作が書かれた一文をこれ以降の部分から四十五字で探し、最初の五字を書き抜きなさい。

問三——線部②「これ」とあるが、この内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 徹夫は監督であるが、智の父親でもあるのに智を最後の試合に出してやることができなかったというこ
- 2 徹夫にとって監督として最後の試合なのに、強豪チームと対戦することになってしまったということ
- 3 智は一日も休まずに練習に参加して真面目に頑張ってきたが、最後まで試合に出られないということ
- 4 智にとって小学生最後の試合なのに、六年生の智ではなく五年生の長尾君がベンチ入りしたということ

問四——線部③「レギュラーに……後ろ姿」はどのようなことの具体例として父の脳裏によみがえってきたのか。1は十字、2は九字で文中から適切な部分を探し、解答欄に合うように書き抜きなさい。

解答欄 1 (☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐) のにそれが 2 (☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐) の具体例

問五——線部④「本音ではそれをずっと待っていたのかもしれない」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 父親である自分が監督をしているために周囲の目が気になってしまい、智をレギュラーにすることができなかったから。
- 2 智が自分で野球の才能がないことに気付いてくれば、徹夫が智に忠告する必要がなくなるから。
- 3 自分が監督を務めるチームで智はレギュラーになる力がなく、親子で同じチームに在籍ことを恥ずかしく感じていたから。
- 4 頑張ってもレギュラーにならないことは明らかなのに、ひたむきに努力する智の姿を見ているのが辛かったから。

問六——線部⑤「メンバー表の〈加藤〉を……〈長尾〉と書き込んだ」とあるが、この動作はどのようなことを表しているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 主審に声をかけられて、監督としての任務を全うしなければないと気付いたということ。
- 2 長尾君の両親が来ていなかったため、父親としての自分の気持ちが勝ってしまったということ。

- 3 監督としての自分の立場に気付き、父親としての自分の気持ちを押し殺したということ。
- 4 二十連勝がかかっているため、迷うことなく監督としての決断を下したということ。

問七——線部⑥「『いいことがないのに、がんばる』智の気持ち」が具体的に書かれている部分を十字で探し、書き抜きなさい。

問八——線部⑦「A」に漢字二字の語を入れ、「結果はほぼ分かっていて見通しがつき、あとはそうなるのを待っているだけである状態」という意味の慣用句を完成させなさい。

問九——線部⑧「B」に入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 いらいら
- 2 わくわく
- 3 はらはら
- 4 どきどき

問十——線部⑨「(a)……(d)」に入る語として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。

- 1 それでも
- 2 また
- 3 たとえ
- 4 つまり
- 5 ところが
- 6 やはり

問十一——線部⑩「C」に入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 突発的
- 2 必然的
- 3 偶然的
- 4 致命的

問十二——線部⑪「うつむいて、もう顔をあげなかった」とあるが、この時の智についての説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 最後の試合に出られなかったということを悔しく思いながらもチームメイトを励まそうと必死に明るく振る舞っていたが、もう自分をコントロールできなくなってしまっている。
- 2 チームメイトが苦しんでいる時に自分がチームに貢献できなかったことを残念に思う気持ちに加えて、監督である父親が自分を試合に出してくれなかったことを恨んでいる。
- 3 相手チームのピッチャーに抑え込まれる半面、江藤君は相手チームに次々とヒットを許してしまっている。そんな江藤君が監督である智の父親の指示に従わないことにいら立ちを覚えている。
- 4 四番バッターの前島君をはじめ、智のチームに全くヒットが出ないことから、相手チームのピッチャーにはかなわないと負けを認め、すがすがしい気持ちを感じている。

問十三——本文の内容として正しいものには○、誤っているものには×を解答欄に答えなさい。

- 1 徹夫は、少年野球の監督として父親の心情を一切持ち込むことなく指導に当たることができている。
- 2 智は、自分は野球が下手でチームに迷惑をかけてしまうから、試合には出たくないと考えている。
- 3 智と同年のチームメイトは智が最後の試合にベンチ入りできなかったことを気にかけている。
- 4 後任の監督は長尾君を新チームのエースにして、連勝記録を更新しようと考えている。